# いこいッシュ

第25号

平成24年1月
発行：依田窪老人保健施設
広報編集委員会
〒386-0603
小県郡長和町古町3365-5
TEL：0268-68-0281
FAX：0268-68-0283

## 新年のごあいさつ

施設長
石橋久夫

新年明けましておめでとうございます。

昨年の3月11日、東日本大震災とそれに引き続く原発事故は未曾有の大災害となり、多くの死傷者が出ました。亡くなられた方々に対して哀悼の意を表するとともに、一日も早い復興を願っています。そして、本年が地域の皆様にとっても、被災地の皆様にとっても、幸多からん一年であることを心から祈念いたします。

依田窪病院写真館写真集
自然といのち「自然との出会い」より
撮影：石橋施設長

清水寺の森清範貫主(もりせいはんかんす)が描かれた昨年の漢字一文字は「絆」でした。今日本の国が、欧米に端を発した市場原理主義のるつぼにはまって、日本の伝統ある古風な美徳を見失いつつあります。我々は自分たちの地域を守る意味でも、「絆」という言葉に象徴される日本人の精神をもう一度しっかりと熟慮することによって、人が生きる意味を考えてみたいと思います。

## 「家族の絆と老健いこいの使命」

釈尊仏陀(しゃくそんぶっだ)は、生老病死を「四苦」と呼び、生死のこと全てを苦しみと断じました。そして、その苦しみから脱却することを解脱といい、「色即是空　空即是色」とは、人の心に渦巻く欲望や執着から解き放たれるならば、そこには自ずと慈悲の心が光り輝くというものです。我々凡人は、なかなかそういう訳には参りませんが、精神のあり方を今一度みつめ直してみることは、意義のあることでしょう。

平成12年度に介護保険制度が始まりました。その事を皮切りに、「介護の社会化」ということが声高に叫ばれました。しかし、年老いて心身が不自由になった時、その世話は子供がするのではなく、社会が看てくれるものだと考え違いをするのは、「家族の絆」を理解しえない早計な人間の態度です。親はわが子を慈しみの心をもって命がけで育み、そして、子は親に孝を尽くすというのが、この国の古くからの伝統なのです。老親の世話をする心のあり方、精神性というのは、子供としての資質のはずです。幼児虐待が決してあってはならぬように、老親の虐待もあってはならないものです。しかしそういった風潮が病のように蔓延していくというのは家族の絆が失われつつある証拠で、淋しさを禁じえません。

ただ、親子の絆に代表される家族の絆が尊重されるには、単に年をとればいいというのではなく、「老いの境地」といった人間としての熟成の中で、家族の情愛も一層強く育まれるものなのではないでしょうか。

やはり人間の生き方というのは大切です。また現在は介護保険制度のもと、多くの社会的サービスが完備され、1割の負担でそれらが利用でき、家族の介護負担は、かなり軽減される仕組みになっています。短期入所や通所サービスを上手に活用しながら、在宅で老親の介護をするというのが、やはり理想であり、人間としてのあるべき姿と思います。

老健施設いこいの施設長になって、現在10年目です。何とか経営も軌道に乗り、職員全員が結束して、利用者や地域の皆様に、喜んで感謝していただけるような施設を目指して頑張っています。〝笑顔と優しさ、そして感謝の心〟が、老健いこいのモットーです。ですが、老健いこいにいるお年寄りの多くは、自分の家に帰りたいと切に願っているのが実情です。

ここでは老健いこいの使命とは何なのかをわかっていただきたいのです。特別養護老人ホーム「ともしび」と、老人保健施設「いこい」の役割は全く違います。特別養護老人ホームは、自分の家で暮らせなくなったお年寄りの終の棲家です。いのちを終えるまで、生活の場として暮らす施設です。一方で、老人保健施設の使命とは、在宅復帰と在宅支援です。特養のように何年も暮らすという施設ではなく、3ヶ月を目途に、入院等で体の弱ったお年寄りが、身体の機能低下や認知症に対する集中的なリハビリを行って、我が家に戻ることが大きな目標なのです。家に戻ったあとは、在宅生活を継続するために、老健いこいの短期入所や通所リハビリ（デイケア）を利用して、心身を健全に維持することが肝要になります。ということで、老健の究極の使命は、在宅ケアの推進にあるのです。

最期に、地域のお年寄りにとって、人生苦しみだけというのではなく、満ち足りて人生を完結していただけるよう、ご家族の協力をいただきながら、老健いこいのスタッフ一丸となって、この依田窪地域の高齢化社会を支える一翼を担ってまいる所存です。よろしくお願いいたします。

## ほっと通信　いこいのひととき

このコーナーは、職員のケアに対する意気込みや、施設での楽しい出来事などをお伝えします。

### 長和町文化祭出品　作品作り

介護員　池 内 由 紀

10 月 30 日に長和町文化祭の見学に出かけてきました。

たくさんの展示作品の中から、ご自分で作られた作品を見つけられ微笑んでおられたり、ご自分の趣味に合った作品に出合い、良い刺激を受けられた方もいらっしゃいました。

いこいから出展した作品のひとつに「厳島神社」と題した貼り絵があります。今回は、その作品作りについてお話したいと思います。まず、この作品を作ろうと思ったきっかけは、ご利用者が「何か風景で有名な場所の作品を作りたい。」との一言から、皆さんで選ばれたのは世界文化遺産の厳島神社の赤い大鳥居でした。紙を丸める作業をする方、ボンドで張り付ける作業をする方など、それぞれ得意なことを分担して和気あいあいと作業が進みました。文化祭が近づいてくると「後少しだから、早く完成させたいね。」と、もうひと踏ん張り。作品が完成した時には、皆様が満足した表情で達成感にあふれていました。文化祭会場の体育館でも、赤く大きな鳥居は一際目立っていたように思うのは手前味噌でしょうか。

ご利用者一人ひとりが、何らかの形で役割を持っていただき完成した作品は、今は「いこい神社」と崇められています。「ご利益あるかな。」「お参りしなくっちゃ。」など、神社詣でが日課となっています。これからも、たくさんの作品作りなどを通じて、ご利用者の趣味を引き出していけるようなケアをして行きたいと思います。

高橋太久雄 様（作品と共に記念撮影）

■□出展されたご利用者様からひとこと□■

私は、絵の知識は何も持たない素人です。

絵を学ぶきっかけは、原因不明の痛みが私の全身をむしばみ、身体が思うように機能せず、身体の自由が奪われたことでした。

毎日苦しみに耐えていましたが、あることがきっかけで別の道へ進むことができました。それが絵画でした。この道に出会って 3 年半になります。

いこいでも時折、絵を描いて楽しんでいます。今回はその中から数点の作品を出展させていただきました。大勢の方に観ていただきありがとうございました。

## ふれあい

（平成23年10月から平成23年12月までの出来事）

### 手話ダンスボランティア

（11 月 21 日）

手話ダンスに手品、そして舞踊と、毎回楽しい出し物をありがとうございます。

### 長門小学校 2 年生との交流

（10 月 19 日）

ほのぼのとした交流会となりました。

### 大運動会（10 月 16 日）

「赤勝て！白勝て！」スポーツの秋を満喫しました。

通所部門は12月8～10・12～14日の6日間行いました。大勢のボランティアの皆様にご協力いただき、楽しい会となりました。

「どちらの駅長さんですか。」とご利用者から聞かれる立派な服装で、ハーモニカを演奏してくださった村松誠一様

### 忘年会

入所部門は 12 月 11 日に行いました。職員のハンドベル演奏や、カラオケ大会で盛り上がりました。

★　編 集 後 記　★

新年明けましておめでとうございます。

施設長のあいさつにありましたように、職員一同、老健施設の使命達成に向けて、励んでまいります。今年もより一層のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

また、被災地の一日も早い復興を、心からご祈念申し上げます。「がんばろう日本」

（編集委員）